

カントの

『神の現存在証明の唯一可能な証明根拠』について

亀尾利夫

一 『証明根拠』の成立——問題の提示——

一七五五年『一般自然史と天体の理論』でカントは「自然は混沌の中においてさえも規則的かつ秩序ある様にしか動き得ない」といふ正にその事の故に神は存在する、(Casirer's Ausgabe, Kant's Werke I, S. 230) といふ基本的な考えから機械論的世界観と目的論的世界観とを結合、調停しようとした。その調停は方法的な反省、更に先験的方法へは遙かに遠く、自然科学的方法、数学的計算、形而上学的思惟とがそれく適當に用いられ、寧ろ構想力が最も生きくと活躍しているといわれる (Casirer: Kant's Leben u. Lehre s. 56) 様なものであつたとしても、そこに表現されたカントの問題意識は第三批判へまで一貫してゆくものであつた。『自然史』において前提とされ、確信とされて済んでいたものが高次の自覚へと齎らされ、確信の証明と根拠とへの追求が形而上学の方法への反省を伴つて新たな問題と化せられてゆくのである。

『自然史』発表と同年の九月廿七日、ケーニヒスベルク大学私講師就任論文として『形而上学的認識の第一原理の新解釈』を発表したカントは、こゝで一七四五年以来の自然科学的乃至自然哲学的主題の諸研究から、始めて形而上学的認識論の主題へ移り、それを正面からとりあげた。こゝでは形而上学の方法に関して、ヴォルフの方法、クルジ

ユウスのヴォルフ批判にふれながら模索する。そして存在根拠と認識理由との峻別、可能性一般の原理としての、神の現存在証明が論理的に把握される。即ち、伝統的な形而上学を批判する地平が見え始めるのである。続いてカントは地震に關する諸論文、『物理学的单子論』、その他を経て一七五九年の『棄天観について』、一七六二年『三段論法に四つの格を分つ事は精しすぎる誤りであるという事』、六三年の『質量概念を哲学に導入する試み』、『神の現存在証明の唯一可能な証明根拠』、翌年の『自然神学及び道德の原理の判明性に関する研究』等々を次々と發表し、『証明根拠』、『判明性に関する研究』においては包括的な問題を概念的に扱う。この事は『新解釈』を書いた基盤が概念化されてゆく事を意味する。そして、その問題の世界観的な規模と、その解決における概念的明確さにおいて、『証明根拠』と『判明性に関する研究』の二つが整理、決算の姿を示しているといえる。それは批判期に至るカントの發展史において、伝統的、独断論的形而上学の基盤を明らかにし、その上にありながらもより高次の地平を目指しているという点で劃期的である。六二、三年が転回点とされるのはこの意味である。この二書は内容的には大差はなく、『判明性』はアカデミーの論文募集の公示が六一年にあり、六二年末に執筆され、『証明根拠』は六三年に出版された点、フォルメイ宛の書簡(一七六三年六月二十八日)で、すでに二、三年前からこの問題に携わつていたというのも、両書に於ける共通の問題を意味し、両書が同じ地平から平行して生み出されたものであることは明らかである。カントの以前の時期のものど較べて、対象領域においては天体、自然現象等から人間自身へと移つて来るのが六〇年以降の特徴である。そして、それは機械論的な世界を觀察し、思考する人間自身を、思考と意識をその構造と作用に於て反省せざるを得なかつた七〇年代、更に批判期への準備であつた。すでに論理と存在、思惟と現実との分離を行つた意識(理性)は(五五年の就職論文、『質量概念』等々)存在を思惟する悟性と、存在を絶対的に定立する感性とを、更に主観と客観との相関関係を模索し始める。然しまだ、その関係の中にとどまり、相関関係を外から考察する事を主題としていない。主観と客観との関係

は神の存在証明に必要な限りで比較的独断論的に思惟されている。が然し形而上学の問題は認識論的問題を必然的に呼び起し、認識論の問題は形而上学の問題を背骨とし、両問題は相互に離れ難く結びつきつゝ体系化されてゆく。

こゝでカントの先行者からの影響について若干考えて見ようと思う。リールはこういふ。——五五年の就職論文での現実的、事実的な原理の意味と論理的な意味との区別はクルジュウスに從つてなされた。又フィッシャーは、カントがヴォルフ、ロック、ヒュームの立場を順次に経、そしてライプニッツ・ヴォルフの影響から英国の経験哲学への移行は三つの著、『三段論法』、『負量概念』、『証明根拠』によつて証明されるというが、この様なヘーゲル史観に從つた「止揚」の考え方はとらない、寧ろヴォルフの影響がカントの全發展を通じて大きい、そしてこの継続的な流れによつて英国哲学さえ本質的に修正されるのであつて、この継続の流れを見落してはならない。更に又フィッシャーは『判明性』の懸賞論文と『証明根拠』とを区別するが、この両書は同時に着手されたもので区別はそう考えられない。又ロックからヒュームへの移行を六六年とフィッシャーはいうが六三年にすでにヒュームの影響がみられる、と。——更にリールはラムベルトとの關係を、六二年から六六年の著作群においてカントはラムベルトの方法を用い、定義から出發しないと云う事を最高の規則とした、という。(A. Riehl: Der Philosophische Kriticismus I. s. 229, 276, 282 ff.) これに対して、カッシーラーはライプニッツ哲学の影響をとりあげる。(E. Cassirer: a. a. O. S. 62f.) 又『認識問題』第二巻ではクルジュウス、グランベール、更にモウベルテューイとの近さを指摘する。(s. 399, 409ff.) その他諸家の意見を精査する事は出来ないが、例えば論理的なものと現実的なものとの区別がクルジュウスの名を出しながら就職論文で行われたことの如きを思う時、やはりライプニッツ・ヴォルフ哲学、クルジュウス、ランベルト、殊にクルジュウスとの關係が明確にされる事が遺された大きな問題である様に思われる。

今は、まずこの『証明根拠』でのカントの問題が何であつたかを考察しよう。そして、その手がかりを序言に求め

る。表題は明白である。「神の現存在証明の唯一可能な証明根拠」。然し序言はこの「証明根拠」という点を強く弁ずる。「私は、あらゆる我々の認識のうちで最も主要な『神が存在する』という認識がもし深い形而上学的研究の支えをもたないならば、動揺し、危殆に瀕するかの様に考えはしない。私は、私が現在しようとしている様な努力の利益をそれ程大きなものとは思っていない」という書き出しの一節は、『自然史』が或る意味で素朴に神の存在証明を行ったものであつたのに比べ大きな変化を示している。こゝではたゞ「証明の証明根拠」、「主要設計図の輪廓」が「読者の吟味の眼前に供せられるのである。」「神が存在する」という事を証明する為には、「人々は形而上学という底知れぬ深淵を目がけて潜つてゆく勇氣がなければならぬ。岸辺もなく、燈台もない暗澹たる大洋、此処では仕事を始めるには人々は恰も船影すら見当らない海洋を航海する航海者が何処かの地上陸するや否や、自分の航路を吟味し、自分が航海術の命じ得る限りの凡ゆる周到な注意をしたにも拘らず、万一人知れぬ潮流が彼の航路を誤らせはしなかつたかどうかを検査する如くせねばならない。」というカントは形而上学が深淵の如くである事を識つていたのである。これを形而上学に対して懐疑的になつていと人々はこの形而上学が深淵の一節と結びの一節「神の現存在を確信する事は全く必要である。然しそれを証明する事はそれ程には必要でない」とはしかく単純ではない。「自然は混沌の中に於てさへも規則的かつ秩序ある様にしか動きえないという正にその事の故に神は存在する」という一七五五年からの思索が結論的に表現されている。神の存在の確信は揺ぎないものである、が然しその証明の困難さが明らかになつてくる。そこで数学の様に証明はできない、従つて形而上学の方法が数学のそれと区別されたものとして探究されねばならなかつた。一七五五年には神の存在の「確信」とその「証明」とは一つに未分のまゝにあつた。それが前提されていたという事である。「確信」が「確信」として明らかに区別されるという事は以前の立場が反省され、自覚に齎らされたという事ではなからうか。形而上学と数学その他との方法的な混淆からの脱出、自然神学的証明の

反省が、根本的には「確信」を「確信」として、その確信の基礎づけを努める努力であり、その努力の上にこの書は成り立っているのであるといえよう。カッシーラーは、「経験が実存在の唯一の標準であるならば、現実性についての我々の認識は感性的観察をこえられない。それ故、経験可能性の外にある無限な現存在はコントラディクチオ・イン・アデクトオになつてしまふ。この点に『証明根拠』が成立する」といふ (Erkenntnispro.。神の存在証明、機械論 (自然科学的、後天的立場) と目的論 (神学的、先天的立場) との調和という根本テーマは『自然史』以来のものであり、事実こゝにも『自然史』の要約が含まれているのであるが、そのテーマの解決方法、更に把握の地平が異なる。カッシーラーが前述の様に『証明根拠』の位置を示し、「カントは不可能な事を果そうと企てる」(S. 593) と評するのは、この地平の相異を考えない限りでの事である。すでに方法的な反省を始め、分析的な方法を形而上学の方法としてとりあげたカントは、こゝで問題を端的に形而上学に置く。

二 改良された自然神学的証明

『自然史』においてすでに一種の自然神学的証明をもつて現れたカントは、その位置から出発し直す。自然神学的証明を分析し、区別する。「神の現存在を神の諸々の作用から認識しようとするあらゆる仕方は次の三つに要約される」(Kants Wer.。その一つは、全く超自然的な「奇蹟」によつて神の現存在の確信が惹き起される。この場合自然の秩序は中断され、そこに自然が従つている力を直接に表示するものが知覚される。然しこれは啓蒙の子であり、理論の中にあつたカントにとつては遠いものである。学問的ではないといつて拒けられる。たゞ野番に対してはこの手段しかない事は認める。よく教養された魂は、自然の秩序が示す多くの偶然的な美や合目的な結合を見出すのであ

る。第二は自然の偶然的な秩序が神的な創始者を推論せしめる場合である。そして第三に必然的な統一、即ち自然の合法則性において必然的であるものが、凡ゆる可能性の最上の原理に導く場合である。最後の場合が最も哲学的である。この第三の方法がカント自身の方法なのであるが、カントは終の二つを自然神学的方法となぜける。この従来の自然神学的方法の主な特徴は次の点にある。完全性と合法則性が、まず偶然性の面からとらえられる。そして、次に技巧的な秩序が合目的な関係に従つて示される。その秩序から賢明な、善き意志が推論され、同時に善き意志と創始者の測り難い程の力の概念とが一つにされてしまう。このような従来の自然神学的方法はすぐれたものである(O. s. 123)。これはカントの区分によれば第二の方法であり、カントはこの改良を企てるわけであるが、まずその長所と短所とをあげる。即ちその長所は第一に「確信が極めて感覚的である。」(Kant, aa.) 第二に最も自然であり、第三に崇敬に値する存在の高い叡智、配慮、力についての非常に直観的な概念をつくり、驚嘆、謙遜そして畏敬の念を惹き起す最大の力をもつ。「この方法の確実性そのものも数学的ではなく、道徳的であるにしても、その一つ一つが非常に力強い印象をもつている」(Kant, s. 124)。然し欠点もある。その一は偶然性という事を重視する、即ち機械的必然性を認めまいとする(s. 124-124)。その二はその結果十分に哲学的ではなく、更に哲学的認識の拡張を妨げさえたという事である(Kant)。何故なら、「諸々の道徳的根拠に、即ち目的からの説明に頼るといふ事は、諸々の物理的根拠が必然的な、一層一般的な法則との結合によつて帰結を規定するであろうと推測されうる余地がある場合に、哲学的洞察の拡張を妨げる」(Kant) からである。更に第三に世界の技巧的結合の創始者、建築者を証明する事は出来るが、質料さえも創造者を証明するには十分でない。この第三の欠点としてあげている事から、我々はカントの中に生きていくキリスト教の神を考へる。プラトンもアリストテレスも、古典ギリシヤの精神は神を建築師、形式を与えたものとは考へたが質料、素材さえも創造者と考へなかつた。カント自身が「恐らく、啓示が我々に、世界は神に完全に依

存しているという事を教えた後にのみ、哲学も又、初めて自然の、素材をなしている物そのものの起源を創造者なしには考える事が出来ないとし、そう考えるべく相当努力するようになったのである。」(913)と語っている如く、創造者としての神の觀念はキリスト教と共に始まるのである。

これらの欠点を改良する事が問題となる。まず最も哲学精神を含まねばならない。というのは必然的、一般的な法則によつて自然の事象を説明するもの、機械論的な自然説明に矛盾せず、一般的法則から質料さえもの神的創造者へと昇つてゆくものでなければならぬ(914)。「これが人間理性の歩むべき道でなければならぬ」(914a)。機械論的世界観に反するものであつてはならなかつたのである。この様な改良された自然神学的証明によつて与えられる宇宙論の一例が続いて示される。それは『自然史』の要約である(913)。然しこれは一例であり、それも「自然の最も素材的な基礎をなす大なる塊と、その軌道についてのみである」(916)。この改良された自然神学的証明は原型的には『自然史』での所論と異なる所はない。然しこの書物の問題はこゝから始まる。この様な神の現存在の証明が如何にして可能であるか、その証明根拠が問われねばならない、それは先天的になされねばならない。問題は極めて批判的様相を示してくる。

三 神の現存在証明の証明根拠

「大なる真理、神が存在するとの確信はもしもそれが最高度の数学的確實性をもつべきであるならば、それは唯一の方法によつてのみ到達されうる。」「本来充たさるべき要求を見失つてはならない。それは……唯一の存在体の実在性を……数学的直証性をもつて証明せんとする事である」(917)。

神の現存在証明の証明根拠は大きく次の二種に分けられる。即ち「単に可能的なるものの悟性概念から」とるか、
 「実存在するものの経験概念」からの何れかである。更に「一の場合は、(1)「根拠」としての可能的なるものから
 「帰結」としての神の現存在を推論するか、(2)「帰結」としての可能的なるものから「根拠」としての神的存在を
 推論するからであり、「二の場合も、(1)第一のそして独立的な原因の実存在がその概念の分析を介して推論されるか、
 (2)経験が教えるものからその原因の現存在及びその性質が直接に帰結されるかの何れかである (s. 164-170)。
 「一」の(1)の推論が可能であるとすれば「可能的なるもの」の概念の分析によつてその中に実在性が見出されねばなら
 ない。とすると現存在は一つの述語の如くに可能的なるものの中に含まれねばならない。然し、この事は不可能であ
 る。何故なら、述語を全部考えてみてもたゞそれは可能的であるにすぎない、現存在は可能的な存在体の述語の外に
 あり、実存在するというのは事物そのものの絶対的な定立である。論理的、概念的な述語と絶対的な現存在の定立と
 は異なるからである (s. 165)。吾々はライブニッツの『理性の真理』と『事実の真理』との区別を想起する。前述の如
 くカントは私講師就任論文、『負量概念』についての論文において認識理由と存在根拠、論理的理由と存在根拠とをク
 ルジュウスに從つて峻別している。こゝからカント的な思惟と存在との二元論がはじまるといわれるが (K. Jodel: Wandlungen
 der Weltanschauung, s. 204 f.) の二つの峻別が方法的にも新たな第一歩となる。次に「一」(2)即ち帰結としての諸々の物の可能性
 から根拠としての神の現存在への推論、ここでは或るものが可能である為には何らかの実存在するものが前提されね
 ばならない。もし現存在が廃棄されるとすれば、何物も措定されなかつし、何等思惟しうるものもなく、可能性は消滅
 する。そのものの廃棄自身が、あらゆる内的可能性一般を廃棄する事になるであらう様な或る種の実存在がある。或
 るものが絶対的に必然的な仕方である。その存在は発現も消滅も不可能であり、永遠である。この様な存在は他
 の存在がこの存在によつてのみ可能であるから最高度の実在性をもつ。こゝには悟性も意志も属している。従つて精

神でなければならぬ。かゝるものは神である。この存在は正しく人々が最も簡潔な名前をその特徴に与えようとするあの神的存在である (s. 166)。かくてこの推論は可能である。〔二〕の(1)経験概念から因果的な推論によつて第一の、独立な原因の実存在に、その原因からその概念の分析を通してこの原因の神性を表わす諸性質に至るヴォルフ学派が有名にした証明は、単に諸々の概念の上に築かれているのであり、〔一〕の(1)と同様にして不可能である (s. 166)。この事がカントの最も重要な事であつたらしい (s. 167. Anmerkung)。〔二〕の(2)実在する物の経験概念から神の現存在及びそれと同時に神の諸性質を推論する仕方は可能であり、価値がある。自然神学的証明として挙げられたものであり、その意義を認めよ (s. 168)。

こうして、可能な仕方は「万物の内的可能性をも何らかの現存在を前提するものとみなす論」即ち〔一〕の(2)と、「世界の万物のうちに知覚された諸性質と世界全体の偶然的秩序を通してのみ最高原因の現存在及びその性質の証明へ至る」(s. 169) 自然神学的証明との二つの証明のみである事になる。そして前者は「存在論的証明」、後者は「宇宙論的証明」となすけられる。然し後者は「凡そ証明というものがもつべき厳密さをもつ資格を具えていない」(s. 171)が故に、存在論的な証明根拠のみが可能か、証明の仕方はないかの何れかになる。然し「たゞ一なる神とそしてたゞ一つの証明根拠のみが存在する、この証明根拠によつて神の現存在を……必然性の知覚をもつて洞察する事が可能である。——かくいう判断自身が既に対象の性質によつて直接的に導き出されたものである」(s. 171)。かくて「存在論的」な証明根拠のみが可能である。然しそれに基づいた証明が困難な場合には感覚にみちた、美しく、分り易い宇宙論的な証明に従うがよい。こういうカントは神の現存在を信ずる事が、それを証明する事より遙かに重要かつ必要だと信じているのである。こゝで「信仰」と「知識」という句が想い起される。然し、この存在論的証明根拠をもつとよく考へてみる必要がある。これはアンセルム、そしてデカルトの存在論的証明とは異なるものであるという事、そして

この事はどんな意味をもつか、こゝにカントの本来的な問題がどう反映されているかが問われねばならない。

四 カントのいう存在論的証明について

存在論的証明は通常、神の概念或はその本質から神の現実的実存在を推論する証明とされる。最高、完全、絶対なものは当然実存在を含まねばならず、単なる思惟内容のみではありえない。だから神が存在しないという事は矛盾するといふ推論である。この証明をカンタベリーのアンセルムが最初にとりあげた (R. Eisler: Handwörterbuch der Phil.。この証明に対して『純粹理性批判』においてカントは判断の無制約的必然性は事象の絶対的必然性ではなく、この証明は「論理的述語と実在的述語との混淆である」(B. 626)、「概念の(論理的)可能性から直ちに物の(実在的)可能性を推論してはならぬ」(B. 615 (Anmerkung))、等々(『神の現存在の存在論的証明の不可能について』(B. 30 ff)を参照)といつて否定するのであるが、この書でも根拠としての単に可能的なるものの概念から帰結としての現存在を推論する仕方として否定される。だとすればこゝでカントのいう存在論的証明とは何か。「万物の内的可能性をも何らかの現存在を前提するとみなす論」(B. 169)或は「帰結としての諸々の物の可能性から根拠として神の現存在への推論」(B. 166)が「存在論的証明」といわれる。これは所謂存在論的証明と逆である。後者が根拠としての可能的なるものの概念から出發するに對して、帰結としての物の可能性から出發する。詳しくはこの書の『神の現存在証明の爲の証明根拠が与えられる第一部』(S. 74)で述べられるのである。その推論をたどつてみよう。

初めに現存在一般について述べられる。現存在は述語或は定義ではない、述語は単に可能的であるにすぎないが、現存在は可能的存在の述語の外にある(Erste Ber. I)。そして現存在は事物の絶対的定立であり、その事によつて常に単

に他の物との關係として措定される述語とは區別される。神についても正確にはこういわるべきである、「或る実在するものが神である、即ち或る実在するものに神という言表によつて我々が總括的に表示する諸々の述語が来属する」(29)と。然し、前もつていつてしまえば、この様な証明の形式における逆転は、カッシーラーのいう様に証明の本来的、論理的な内容にはふれない、存在論的なモチーフは覆われるが超越はなれなく (Casier: Erkenntn. s. 324)。次に、何が現に措定されているかという事と如何にそれが措定されているかという事とを區別する。そして後の点においては、実在するものによつては単に可能的なるものに依る以上のものが措定される。何故なら実在するものは事象そのものの絶対的定立にまで及んでいるから。第二考察において、不可思惟性或は不可能性の形式的方面と質料的方面、又一と他との矛盾律による一致を形式的方面即ち可能性における論理的なるものと、或物、^{エトワックス}換言すれば、この様な一致の關係にある所の物、^{ワグス}可能性の実在的なるものとに區別する(1)。そして何らかの可能性がある時には何らかの現存在が前提されており(2)、何物も実在しないというのは不可能であり、又そのものによつて一切の可能性が一般に廃棄される様なものは端的に不可能であるとされる(3)。従つてあらゆる可能性は何らかの現実的なるものの中に与えられる(4)。第三考察で述べられる事はこうである。単に可能的な概念における必然性の如き論理的必然性と、現存在の必然性である絶対的必然性とが區別されねばならない(1)。そしてそのものの廃棄自身があらゆる内的可能性一般を廃棄する事になるが如き或る種の実存在があり、そのものは端的に必然的である。従つて或るものが絶対的に必然的な仕方で実在する(2)。続いて、その必然的存在は唯一であり(3)、不変、永遠であり(4)、最高の現実性を含み(5)、それが神である事が述べられる (Vierle Betrachtung)。

この証明根拠は「唯単に或物が可能的であるという事に基づいている。従つてこれは完全に先天的になされる証明である」(36)。この証明根拠によつて「自然の必然的統一自身が諸々の可能性のうちに基づいている故に、賢明な存

在——それがなければ凡てこれらの自然物そのものが不可能であり、又偉大なる根拠としてのこの存在のうちに非常に多くの自然物の本質が非常に規則的な諸關係に結合されるのである——がなければならぬ」(註2) という言が支えられる。こゝに、改良された自然神学的証明、いや機械論的自然觀と神の存在との結合が、成立するのである。

この推論の仕方は、第一に現存在が論理的な定義、述語と異なり、絶対的定立であるという事が重要である。これは思惟と存在という形で二元論の登位であり、方法的には分析的な方法の採用が行なわれた事であり (A. Rehm, i. a. O. s. 285)、歴史的にはヴォルフ学派の合理的独断論からクルジュウスの存在論或は英国の經驗論的方向への移行であるといえよう。(こゝで「クルジュウスの存在論或は英国の經驗論的方向」と並べるのは説明を要するであろう。即ち、本質的には、クルジュウスは非合理主義であり、英国經驗論は經驗主義的合理主義であつて二つは全く異なる。然しドイツでは、硬化したヴォルフ学派の図式主義形式主義に対して、クルジュウスも英国經驗論の流れも共に対立する。) 然しこの二元論は十分には解決されていない。寧ろ實在性が思惟可能性を支えるという点が強く持ちあげられ、ヴォルフ学派へのアンティテーゼとして存在論的色彩を強く示している。すべての現存在の廢棄と共に思惟のあらゆる實質的なるものもすてられるという現存在の優位がこゝにはある。その限りでは独断論的である。次に、可能的な概念から根拠としての神の現存在へという推論のやり方そのものを考えてみよう。既にのべた可能的なるものと現存在との關係は思惟可能的の制約としての現存在、或は論理的認識の可能性の制約としての絶対的存在の要請というたとすれば批判期の表現を盗み使つた事になるであろうか。何かこういう表現を誘い出すものがある。然し純粹理性の批判を経ていないこゝでは、悟性の自發性とか範疇とかの概念に示される様な面への反省をまだ欠いている。

この様に考察して来ると、カントの意図した神の現存在証明の証明根拠の提示という事は、先に『自然史』を舞台

として述べられた機械論的自然観と目的論的世界観との調和、神の存在の確信の表白を基礎づけ、その根拠を示そうとしたものだといえよう。根拠は先天的に示されねばならない、そこに伝統的なヴォルフ学派と、その反対のクルジュウスとの線を明らかに示す存在論的といわれる証明がもち出され、ニュートンの自然科学的機械論との結合が試みられねばならなかつたのである。カッシーラーは『認識問題』に於てこういつている——存在論を形而上学の領域では完全に制御するという事をしなかつたカントが、自然探究において存在論に明瞭に対立するという事は性格的であると(S. II, 199)。性格的というのは曖昧である。この様な結合はヴォルフ批判と方法的反省とに於て批判期への一步の接近である。又啓蒙思潮克服への一步でもある。が更に、カッシーラーのいう様にこの点にカントの豊かさと限界を見る事が出来る。カッシーラーはこういう——数学的自然科学が基盤をなす、そしてその基盤の上に彼はある。然し、そこから彼は絶対的なものの思弁的認識へ登ろうと努力すると(Erkenntnispro.)。認識の問題を考へる時、カッシーラーの如くいえよう。然しその実相は伝統的ドイツ的な神学的、形而上学的思考が英仏の自然科学的、機械論的思考の根柢、背後に廻つてそれを基礎づけるといふ思惟方式の新たな一步なのである。